

『現代労働問題分析 —労働社会の未来を拓くために—』



大分大学経済学部教授

石井 まこと氏

1990(平成2)年卒

1992(平成4)年博士入

「私と違うことを言いなさい。」

拙編著『現代労働問題分析』

を上梓するにあたってモチーフの1つとしたフレーズだ。今から22年前、経済学部3年生の時、労働社会の歪みに違和感を覚えていた私を受け止めてくれた、当時、横浜国立大学から赴任して日も浅かった下山房雄(先生)さんの言葉である。下山さんも氏の先生から受け継いだフレーズであったと記憶している。このシンプルな言葉と下山さんとの出会いがなければ、今の私の研究生生活はなかっただろう。演劇に入れ込んでいた私にとってみれば、この言葉は世阿弥『風姿花伝』の「秘すれば花なり」と同様の深みがある。

下山さんは私にとって「下山先生」である。だが、研究者仲間であり、ともに社会科学を学ぶ者として、そのように呼ぶのが自然と感じるように「訓練」されていて、先生と呼ぶと少し違和感さえ感じ、こうした呼称を使い続けている。下山さんの勧めで入った社会政策学会も、当時は〇〇先生と呼ばずに〇〇会員と呼んでいたことも、研究者とはそのようなスタンスをとるものだと初期の段階で深く納得したことも大きい。

その下山さんの教えを受けてから20年近くの歳月が流れた。下山さんも今年(2010年)で喜寿を迎えた。現在でも東京で九大時代の院生を中心に月1回の「関東社会労働問題研究会(関東社労研)」を主宰し、その矍鑠とした姿は老いを微塵も感じさせない。

今回の拙編著は同研究会に集う仲間を中心に企画したものである。格差社会、貧困問題の解決が重要性を増す背景には、この20年間一層進化してきた新自由主義的潮流がある。そうした潮流とは一線を画して研究活動を行ってきた我々の考えを、特に若い世代を意識し、「競争型」労働社会とは異なる「協同型・共存型」労働社会を構築するための教科書を



もって、下山さんの喜寿記念の書としようとしたのである。

喜寿記念をテキストという形で出版するのは一風変わった企画であったが、同じ九大同窓生の兵頭さん(専修大学准教授)、鬼丸さん(桜美林大学准教授)の協力や、法律文化社の編集者である田藤さんにも助けを請い、出版までこぎ着けた。特に法律文化社の田藤さんには教科書という企画にもかかわらず喜寿記念付録として24頁からなる別冊「下山さんの履歴書」をつけてもらうというわがままを通してもらったり、学生が購入しやすいように値段を抑えていただいたりとした協力は大きかった。

ところで、この「履歴書」には下山さんが1958年に職業研究者を開始してから今日まで著した著書16点、論文等399点を全て(おそらく)列举した。学術論文でなくても雑文もその「本質」において同じとする下山さんの考えから「雑文等」188点も下山さんの記憶をもとに、可能な限り網羅した。編者の3人に加えて、下山さんが理事を務めていたシンクタンク・かながわ総研の岡本一さんや労働科学研究所の赤堀さんにも書庫に潜ってもらい、骨を折ってもらった。お陰で、ほぼ完璧な形で業績目録が完成でき、このような形での業績一覧は他にはないのでと少しばかり自負している。

今回の執筆は前述の関東社労研のメンバー鬼丸さんよりの打診から始まった。これまで下山さんの暦祝いにおいて、一度も論説を寄せたことがない私としては、いつかは暦祝いの作成をと思っていたこともあり、すぐに本書の企画を考えた。今回の執筆陣

は下山さんを除いて16名に及ぶ。実際にはもっと多くの方が参加する予定であったが、投稿時期等の関係で確実にご投稿頂ける方に絞らせていただいた。実は執筆陣のなかで下山ゼミは私だけである。更には、下山さんの九大時代に薫陶を受けた院生は日本人では私1人、あと韓国の金さんという院生が博士号を取りにきたのみであった。そうしたことから、記念本は難しいと考えていたところ、関東社労研のメンバーを中心に執筆者が揃い、一冊の体系的な教科書ができた。

本書の「はしがき」にも書いているのだが、私は学部生・院生の当時演劇青年であり、研究活動より演劇にかける時間の方が多かったように記憶している。博士後期課程に上がる時にも成績は良くなく、当時の宮川経済学部長から呼び出され、お叱りを受けた不良学生であった。研究と演劇の二足の草鞋を履きふらついていた私を、下山さんは目先の成績には目をつぶり、不良青年の成長を暖かく見守って下さった。そうした私が現在、学部生や院生を教える立場になっている。今振り返れば、こうした時間を過ごしたことで、教育者としての訓練を受けていたことをつくづくと感じる。下山さんは絶えず権威や常識と対峙する。そのひたむきな姿勢を少しずつ学ばせてもらった。そんな姿勢は今回の本書に掲載し

ている論文でも健在である。大学教員として職を全うできているのも下山さんのこのスタンスに接していたからであるし、また出来損ないの院生を見捨てないで見守って下さったからである。本稿で本の内容をもっと紹介するべきだが、下山さんとのエピソードに終始した。本書は下山さんなくして語れないものであり、私も下山さんのためでなければ、多くの執筆者を束ねて編集をすることはできなかったためである。

私が学部・院生の頃、学部図書館に成田さんという当時経済学部で最も古参の司書の方がいらっした。雑談の折、成田さんはある人の記念論文集の巻頭言をみせて、下山さんの記念論文の巻頭言を書くときは、この人みたいに誤字はしないようにと忠告を受けた。その当時は現実味がなかったが、今回、本書の「はしがき」を書く際にその言葉がリフレインで思い出され、細心の注意を払うと同時に、懐かしい思いに浸ったりもした。

九大経済学部では6~7年前まで大分大学から労働経済論に集中講義の担当者を出していた。私のところに順番が回って母校への恩返しができるかと思っていたところが、開講されなくなったようで、残念である。本書を九大生がいかに評価するか試してみたかったのだが…。

編集部よりのお知らせ

- (1) 第47号に『学徒出陣』のころの九州帝国大学」を寄稿いただいた内田勝敏先輩の肩書に誤りがありました。同志社大学名誉教授・東海学園大学名誉教授と訂正しお詫び申し上げます。
- (2) 第48号掲載の本田精一先輩「老残漫筆」に日本経済新聞昭和六十年二月の「交遊抄」欄の「鬼手仏心」を複写引用する際に左端の二行が脱落してしまいました。改めて全文を掲載致します。同窓の諸兄姉の御味読をお願い申し上げます。

交遊抄

人生友なくしては
り得ず千支(と)
一ラウンド終わる
と、その気持ど真に
切なるものがある。
特に我々の世代は、
多くの友を若い時代に失って
る。男らしい、優秀な友が戦場
に青春を散りて去った。生き残
ったのはおれのようなガキばかり
だ。世間(じかん)なるとは
が狭くて仕方なかった。捨てた
なった彼らが、考えもしなかった
であるこの時代を、彼
らに代わって働き苦し
み、かたじけなく生き抜く
ことが、残った者の義務
であるこの心算になった
のは、よほど戦後十年
年もたつてからである。
友達はあつた。大
切にしたいと思ふ。その
一人、井記念徳の田中
茂隆は、昔葉先生を共
にした戦友であり、文学
通の命の恩人である。
昭和二十一年五月、最後の夜襲
正作戦は苦戦の連続、湖南雲
山攻めと、山中重団下激闘一
句ついに激戦を開始する。夫
が得た平野へお、一歩の出口で負
傷した。出血激しく止血帯で止
まらぬ。心もろくがなくな
り、四圍が暗く、寒気がたまる。
これで最後と思つたが、それで
もてんが山奥で救はれた。未練で
あったか。文字通り強雨のなか、
田中重団が血管を解き(ひき)き
し、沈着に手をこたくれぬ。
急造の担架に乗せられ降路(あ

鬼手仏心

本 田 精 一

お前が生きてゐるのは不思議だ
と。職務に忠実、冬山と人
酒を愛する。この尊敬すべき戦友
とくなく酒は、生きる喜びの
味がある。
田中先生は、今や度
に
かたが、おかげで生き
てゐる。
前陣(ぜん)を見て情け
なかつた。鬼手仏心、痛
い。

い)を進行突破、待望の平野に
出る。血だらけの足は、死を同
然であつた。引き締まる腰軍として
後退戦を続ける大隊の負担になる
と、無理やり衛生隊に収容される。
衛生隊の担架で後送されるが、退
却の際、手(て)をこたくれぬ。
一日後、打ち続く戦闘に飯島大
隊長を失い、更に人数に減つた
大隊に出会つた。田中重団がその
機会に手(て)をこたくれぬ。
傷口が腐敗し膿(うみ)をこたく
してゐる。痛いが我慢して、路
上の担架にかがみこ
で肉を切り取り取る。
麻酔(まど)も手(て)にない。
痛さを乗り越し、目の奥
で白いせん光が爆発す
る。肉が半分無くなり、
白い骨が露出してゐる
白(しろ)い骨が露出してゐる

- (3) 次号は第50号となります。昭和50(1975)年に設立された同窓会の35周年にも当たりますので第50号を記念号として、同窓の皆さまから「リレー随想」を次の要領で募集致します。九大時代の思い出、卒業後の社会人としての歩み、最近の感慨その他自由に題材を選んで御執筆をお願い申し上げます。字数1200~2400字程度。締切2011年1月末。問い合わせは同窓会事務局まで。